

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠.....	03
テーマ詠欄 「4」	14
一首評 「そらよみ」.....	18
クロスワード	19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	20
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	22
次回予告・編集後記.....	23

う
た
そ
ら

Utasora

2025.
March
No.

25
ら



ご参加
いただいた
みなさん (五十音順)

がね	@amicus08	千原 (ちば) ち	@kohagi_tw	深影 (ふかかげ) こ	@cotoha_mikage
廻れ井戸	@kareido1111	とかげまろう	@tokagemarou	水上歌眠	@kamin_plz
河岸景都	@kate_kawagishi	中村成志	@nakam8	南の島	@nrkmm
北谷雪	@kitaya_misomiso	なべこ (なべこ) こ	@nabelab00	水也	@m_lya_o
君村類	@kmmr_r09	西淳子	@jacky24Ray	虫武一俊	@mushitake
香子	@kyoko_shogi	西村曜	@nsmrakra	六厭めれう	@meremumai
久保田毒虫	@dokumu44	袴田朱夏	@hakamada_shuka	村田一広	@mucci2022
くろだたけし	@tkuro2016	畑 依裕		森内詩紋	@Njq4oEv95gICRpu
小泉夜雨	@kozumi_yau	薄荷。	@aieohimeco	杜野詩季	@4kitanka55
桜さくろ	@w59f8NwfuJlvq3	ひなお			
鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi	平本文			
西鎮	@xi_zhen_ivUT	廣珍堂	@Hirochin_dos		
寿司村マイク	@xHksbNR4wv1wj8M	福山桃歌	@momoka_fukuyama		
砂山ふうり		古井 朔	@saku_furui		
そう	@iotu	真岡まな	@mao_of_mana		
たえなかず	@suzusuzu2009	まろけ	@mskpompomfuwa23		
多香子		御糸さち	@MEAtsachi		
歌島孟	@Sim1990				

計52名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

うたかた Museum

新井きわ

マティスの描く《金魚》はきつと寂しくてあなたの酸素すつと吸ひ取る
原色の世界に生きしゴーギャンはポリネシアの園、蜜に溺れる
頸切りの刑にあひたる向日葵の二本の黄色 ギシギシとゴッホ
マネの黒見つめる君の瞳孔にわたしはぬいセントラルは黒
《踊り子》の絵葉書そつと持ち帰り足の甲に貼るボルタレン
耳飾り失くした少女が夜夜毎わたしのシーツに青塗りたくる
《刺繍するモネ夫人》縫ひ針は落ちわたしのこころの痛点を刺す
道長とまひろの《接吻》クリムトの黄金のひかり纏ひたり 今

Masala

井倉りつ

自分から手放したのに202号室のカギ 行くところがない
あまやどりまぶたにあまつぶ春先の雨しよっぱいな 点字ブロック
おかしいな君とあまやどりしたときは雨つて甘いと思つたのにな
「孤独なのは誰といたって一緒」ならためしにひとりになりたかつたの
甘い雨がずっと続くと思つてた どんどんどしゃぶりひどくなつてく
誰かさんのいない日々 物足りなくてスパイスを集めたりしている
そういえばさよなら言つてなかつたな 粉々にすり潰すクロープ
寒い日に甘さの足りないマサラチャイ ぴりぴりするけどどうしよつか

枝からのカワセミダイブ見て居ればコセンダングサの花びらが付く
枯れ枯れてコセンダングサ疎らなりカワセミダイブ見るは楽しも
北西の水路にカワセミダイブする人を認めて南東へ逃げる
山道は笹鳴き聞こえ山頂へ参謀総長の揮毫が聳え
台座付き全身像は無くなりて誤解が草の様に生えたり
ポンカンやミカンの輪切りに来るメジロヒヨドリなどのささめきを聞く
休眠の日日草が発芽する初冬から真冬咲かず枯れて
珈琲と大きなシュークリーム食ベ夕餉は魚か肉かは知らず

ウラシマ

今紺しだ

田園の真ん中を行く宇宙船 すこし未来の時空に下りる
相対論なんて知らない きみと同じ速度で老いていけないならば
隣り合つて膝を抱えたそのままで四季のすべてを見た屋下がり
そつと弦にふれる ギターはいつまでもきみと一緒にいるんだろうな
好きな曲みたい今日に頬ずりのやわさをループ再生したい
抱き合つていたら外では五十年経っていましたそれでもいいよ
夕焼けに二人で染まる シュレッダーに言葉は吸い込まれたみたいだ
かげらずに笑おうよ少女漫画の最終巻の表紙みたいに

屋上獲部25

茄子尖れ空は砕けるオートバイにはピアノの呼気が有効
茄子棚に次々獲の成り下がる園芸部の支配下の夕べ
謎のない茄子の迷路の窓べりで焼き茄子を獲そっくりに剥く
肅々と校舎は沈み茄子は浮く獲から棘が奪われていく
屋上の防水層は透き通り獲に嘸まれて空虚な化石
くるぶしの向こうに掘り出したピアノ「屋上二茄子ヲ持ち込ムベカラズ」
ゆつくりとまつすぐ茄子は落ちてゆくはちきれそうな悪夢 かわいい
楽器なら吹くか叩くかする形ラジエーターは茄子の後釜

ヘッダ・ガーブレルになるワタシ

歌島孟

新居には將軍、父の肖像と形見に重い二丁拳銃
あの人のファムファタールになってやる。あんたがミューズだつて言うなら
誰もみなおのずと罪を語りだす召命を受くマタイのように
天啓のような光に背をむける私は嘘を騙るのだから
あなたへと放たなかった銃弾が心に深く残つたらしい
勝ち馬に乗った私はゆくりなくピアノを弾くの喪服のまま
破滅する運命だつて手のうちにおさめたいから引き金をひく
美しい花の匂いに囲まれていたい。棺のなかでさえ、なお

ちようどいい木の棒

がね

一歩目がざりつと鳴った 今日はず、家に帰つてしまつてもいい
地下鉄とホームの間のくらがりにスマホを落とす きがする きつと
ちようどいい木の棒があるのにそれを持たずに社員証をかざした
おはようにはおはようと返す人がいる それだけだった今日の会話は
今日の仕事が出来てしまつたら今日はいなくていいということ
お徳用なんて名前は嫌だよなそれでも得がしたいから買う
ちよつとだけ好きなYouTubeを観ていたら溜めてたお湯がちよつと冷めてた
苦しくもない毎日の苦しさを振り切るために寄る高島屋

リストアート

濁れ井戸

羽束師の免許試験所三十年ぶりに訪う懐かしの道
高密度事故のビデオにおののいてゴールド免許五年ぶり手に
昔から変わらぬダルマ横手には大書で太く交通安全
バスならば五十分待ち歩いても帰れるだろうとぼとぼ歩く
途中からバスに拾われ駅まではリストアートについて考える
青から金、青、金ときて昔日の自転車で何処までも行けた子は
モーニング間に合つたのでソーセージエッグ定食選ぶ雪晴れ
五年後の世界を思う軍拡の党首和平をのたまうテレビ

生命線

河岸景都

この道を真つ直ぐに行く 無理矢理に三半規管を正常にする
すぐ欠けるピンクベージュの指先にいつか重さを与えてみたい
掌の生命線が頼りなく震えるときは少し眠つて
あの人の光が痛い 網膜を焼かれたように見えなくなった
耳鳴りの一番高い音ばかり拾つた歌はとても寂しい
考えて考えすぎて怖くなる脳神経の接続不良
血液は涙のもとになるらしい 知らない振りの演技は得意
明るさは私の味方吸う息で肺の奥まで光で満たす

エンドロール、眠たい

北谷雪

薄氷のような手鏡を選ぶ メイクは知らない 恋ならすこし
将来とは四月のことで浪人はとてもおそろしい孤独死くらい
猫の背が椿を揺らしゆくようにすれ違つたび想う手の甲
子犬には懐かれるほう足元へだれかのMONOが弾みつつ来る
しろ色の甘味は淋しくヨーグルトスカッチだけが例外だった
花柄のミモレを試すときすこし季語になりたがるふくらはぎ
担任とおなじ苗字のスタッフを数える エンドロール、眠たい
こんな日々で良ければ二十年先で青春だったと笑つてほしい

遠いよ

君村類

水晶体 空を知らない地下鉄にただ運ばれて朝がはじまる
みんなみんなうつむいている車両で本当に本当にうつむいている
なにもないからだでうまれてきたはずで親を見るとそれがまぶしい
吐く息がまだ濁っている三月の日差しの中で愚痴がほどける
知っている言葉は氷 きれいなものをしゃべると拒まれてしまう
日が沈む前に抜け出す実家の建物の 影、こんなに長かったつけ
でもきつと脳は忘れてくれるからふるさとしてまじまじと見る
遠いよ、と教えてくれた町に帰る 遠かったのは距離じゃなかった

夢見る頃を過ぎても

香子

少しだけ右上がりかちの細き字に柔く優しき指思い出す
知らないの 君の真意も温もりも知らないままが美しくもある
ぐるぐると迷路彷徨い閉じ込めて あの夜の5秒、永遠となれ
コイントスやつてみようか軽い賭け白黒つけたい悪い癖だわ
今どきの若い子の方が器用かも送信できぬ想い積ませる
日常という紙やすりで磨かれて思い出ばかりが輝いていく
きらきらと光るグラスの縁なぞり もう間に合わぬと割りたき衝動
引き剥がすように日々へと戻りゆく夢見る頃はとうに過ぎてる

ポジティブ

久保田毒虫

ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でみんながみんな疲弊している
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中で飛び交う言葉は刃物しかない
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でこんな世界に誰がしたのだ
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でいい貴方を思い出す日々
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でもしも貴方がいてくれたなら
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でいや貴方にはいてほしくないもの
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中で貴方に泣いてほしくないもの
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中で貴方に泣いてほしくないもの

森ごと燃やす

くらだたけし

給湯器を切ったあとでもしばらくは温かいことあてにしている
繁る葉の影をひとつの影にして孤独を受け入れる常緑樹
白と黒両方ないとわからないわたしのことがいつも心配
積みあげて積みあげすぎて揺れていてもやり直そうと言えない感じ
(ぼくの手と口のサイズに合っている獲物であれば) 誰でもよかった
傷ついた人をかくまう森がある (森ごと燃やすことにしますか)
まだ固く閉じたつぼみの隙間から見えてしまつて春のネタばれ
居間にあるでかいテレビの裏側がこの世で一番裏側だった

駆ける、生きる

小泉夜雨

雪玉をふたつ繋げてできたのがわたしにとって生き物だった
することもなくなつて俯く昼の、マッハじてんしゃ／ダートじてんしゃ
駆け巡るために広野は残されてでんきねずみの進化まばゆい
感情はあつてもなくても困るけどただひたすらに駆け寄ってくる
マリが手を舐めたから好きになつたしヨークシャーテリアを覚えたよ
花で囲んだマリはきれいで死がいちばん怖いことだと思えないまま
風のある日ほど思い返せるすべて汝のあるべきすがたに戻れ
生きていてもいなくてもいい温かいような気がするのが春だから

節分

桜さくら

カロリーはあとできつちり燃やすからチーズまみれの丸餅を焼く
鬼の数以上で豆の数未満 共に数える春の口福
夜な夜なに鬼を祓える面もちの我がトラ猫はひがな寝ており
裸木へ乱反射する蠟梅に溶かるる冬の共犯者達
春色の醸造ビールを注ぎあつて部活のように野望を語る
早すぎる旅に献ずる花灯り墨桜なら天に流れむ
別れよりけじめと思うあの頃のままでの微笑と見つめ合いつつ
ちりぢりの冬眠願望 街角の桜かざせるスタバに寄れば

惑星の中で僕は

鹿ヶ谷街庵

人類が初めて月に降りたつた気持ちで触れる赤ちゃんの頬
S O S 狼煙をあげてU F O がさらいにくるのを待ってた、ぼくは
マイケルに寵愛されたバブルスは人類よりもしあわせだった、か？
ニッポニア・ニッポンみたいなわたしです つめたくされるとすぐ滅びます
予告なくひとは死ぬから惑星の数より多く愛のことばを
気の抜けたビールのような力ないゆびきりだつてまだ覚えてる
東京の夜ふけは白夜 終わらない仕事の合間にラッシーを飲む
マフラーを顔まで巻いて吐く息の果てには星があるんだろうな

爪を噛む

西鎮

肉厚のキャベツを選ぶなにひとつ応えてあげられなかった帰路に
県道を横切る猫がその途中たぶん僕だけを睨んでたと思う
また母の着こなす兄のイモジャアのラインがまつぐ過ぎて冬晴れ
結果的に痒かつたのに掻けなくて目を剥きながらの歯磨きになる
限りあるものばつかつてことぐらい気づいてたはず 枯れた石榴樹
親指の爪をときどき噛む癖の生まれた校舎が廃されてゆく
それなりにしてこい、というおじさんに店長はなにも言い返さなかった
Eテレがもう放送を終えるころ冴えわたるように醒めてきてます

春はいかな〜

寿司村マイク

しずやかにホーローの立つまだ寒い台所には銀のいかなご
ボールざるは陽をつかまえて四キロを洗うあの日の叔母の指先
ザラメ糖まぜる新品菜箸の先から春はやわらかに来る
真っ白なレースカバーのかけられた母のピアノを見たことがない
たたたと鳴らす郵便配達の街かと停める二輪の傾き
くり返す一年でしょう毎年のエプロンならば花柄でした
いかなごのくぎ煮シールのハクリ紙が手を抜け床まで二秒三秒
海のなかの噂話はすべて嘘 レターパックでくぎ煮を送る

S (UNAYAMA) F 岡 (世界は青い現象である) 砂山ふうり

橘に繁る葉っぱの濃くなれば響く香りで蟻が働く
上流でとても知的な生活をするひとが汲む水が飲みたい
モヤモヤの中には滝があるというきみの胸にもぼくの胸にも
真面目さが取りえの虫や花だから色あざやかに生きる溪谷
あのひとの考え方に付き合ってきたひと達の雨の居酒屋
一癖も二癖もある家だから階段上るときは静かに
親亀の上に子亀が子の亀の上に孫亀その背に苺
ともかくにも生きてみて理解した世界は青い現象である

起きて、風

千原こはぎ

水面に文字を書くこと降り出した雨は頭を撫でてくれない
そちらから鍵を開けてよ赦されることのないまま脱ぎかけた靴
後悔の裏側について誰だろう夜になるたび切りつけてくる
今日からも明日からも数ヶ月後もたったひとりにならない甘さ
いつまでも孤独を嘆く明け方の重い瞼にアームは降る
まだ雨が雪に変わってしまうから二月ことばをくれなくていい
思い出にちゃんとするため起きて、風 きみのおいも手放してゆく
ふたりにはなれないひとりで春を待つ 誰ともつながることない小指

おなじ紅

中村成志

人はまだひとりじゃなくて暖冬も誰かのせいに出来るうれしさ
ささくれを深く筆られ玉と湧く血のよう 出し抜けに東の陽
雀らの群れ揺れさわぐ散りかけの梅の蜜ほど濃いものはなく
再起動頻繁にする端末のような四季かも常に風あり
心から笑うことなくわらうとき持ち去られゆく胸のひと掻き
歩き始めてだつてと呟いておなかすいたへ辿り着くまで
おなじ紅ことなる叫び救急車の数台後をゆく消防車
深くふかく澄む紅が夜となり丸子紅茶を急須で淹れる

テレパシーナ

たえなかず

どこまでが愛でどこから詩なんだよ繰り出してくるきみの言葉は
恋人になれるどころか親友も無理で一番安いのり弁
ビタミンC垂鉛もろもろ補給して追いつけてゆけ青春の途
希望とは きみの「いいね」を知ることができなくなって少しうれしい
寝入りばな現れないでガラケーの粗い画質の前の前の恋
地下鉄のホームとおなじ昏さにてきみのほとりに立っていたっけ
春先の野をゆくときに唯一の手荷物として認めるボール
にこにことホラー映画のあとときみはステーキを刺す追いつめながら

猫の日にゃん

多香子

わたしだつて獣ですのと家のミケこたつの中で爪を研いでる
早春賦冷たい風の街をぬけ家に待ってるあたたかい猫
色白のうさぎのような仔が生まれ冬の終わりに皆でバンザイ
バスデイオムライスは何か添えよう、もちろん私の愛と一緒に
相槌をうつように頬に打ちつけるしっぽに今日を慰められてる
恋しても裏切られてもおしまいに指切りひとつ大人の童話
夢見頃そんな私を笑わずに一緒に夢見る三毛猫という
猫バスの運転手さんはやはり猫 花咲く道を踊るように行く

ベリーグッドイノセンス

なべとびすこ

解散のニュースはあの子にも届く揺れてるだろう生きてるなら必ず
君だけが「キミならすべて正しい」とぜんぶ見てきたように歌った
掴めるチャンスをやがと逃したんだよ変わった僕と向き合えなくて
最後まで愛し抜けたら悲しみと抱きあうチャンスはあったんだよな
最近のカレイの煮付けとか食って当時は響かなかった新譜
最高のバンドマンだよ相変わらず翻訳みたいな口調で話す
理想のキミに君はなつててその腕で鳴らしてくれるロックンロール
死ぬまでそこで遊ぶんだろう白黒のギターをピストルみたいに持つて

たつさきじゃないほうのぼくたち

西淳子

起立、礼、着席、起立、礼、ちやくせき、きりつれいちやくせき、きりつれー
三軍のアメトーークーです。ぼくたちはたつさきじゃないほうのヤマザキ
ていかんず。くみたててもくみたててもはこになれない、ならないほうの
それからはクララも廊下に立たされて、ていねんぴつてけつきよくなあに？
僕に愛を 猫にビールを与えても犬にならない 僕にも愛を
月曜の朝の学年集会後、さささきあららつてふらつく
立てるか ぼくが木下龍也なら君を背負つてあげられたのに
廊下にはレッサーパンダ、バケツにはシーモンキーのように懐メロ

でも八首

袴田朱夏

でもわたしから外せないもう君が呼ばなくなった下の名前を
でも（だから）虐げられた人々の真上（真下）で生きていけます？
でもすき間だからとおもう仕事場に仰げば尊しひとりであう
でも祖父は父に農家を継がせずにいまのわたしに時をつなげた
でも神はわたしの今日にひろげゆくあかつきのマーマレードを
でもおれの墓に来たとき吹く風のひとつくらいはたぶんおれだよ
でも北緯38度線を越えられないヒトよ風の勝ちだよ
でも無事におれは育ってしまったよ防火扉の白うそくさい

ジュラ紀の声

薄荷。

夕方の風がこんなに強いからジュラ紀の声で泣きたくもなる
幼子は強くなれること疑わずビスコをビスコのままで頼張る
風と草以外は何かないけれど君の野原はいつも明るい
一心にあの子が踊る（筋肉にいのちの光をまとうせながら）
夕方の爬虫類館のワニの子の眠気がうつって大きなあくび
許されることであるなら校庭で飼いたいティラノサウルス
階段はほんの少しだけ錆びていて展望デッキにあふれる夕日
お互いにもたれかかっているときの重さはたして同じだろうか

綺麗じゃない月

福山桃歌

べつとりと色を塗りあうきみとぼく粘膜だけが真つ赤にお揃い
ひとりでは立てないきみに肩を貸しぼくも倒れていく あつけなく
小説のあとがきだけを読んでもうわかったような顔をする癖
冗長な言葉づかいではぐらかす月は月でも綺麗じゃない月
たくさんさんの言葉だけがありこの夜を表す接続詞が見つからない
何層も重ねた夜の奥にある真意が欲しいと思っちゃうから
眩しさを知らないままで死んでいく羽虫だったらまだよかったのに
食い込んだ指の形の月だったしがみつかれたまるい輪郭

派遣さん

まさけ

わたくしの名前は静かにかき消され「派遣さん」と呼ばれています
クレームの対応させる人たちが食べてるめちゃくちゃ甘そうなチョコ
嘱託の人の誤植を直しよく効くジェネリックの頭痛薬飲む
新しい雇用契約書が来ない 三行半も無くて春風
弁当の固い梅干し噛み砕きゆるり登録してくタイミー
わたくしの後継ぐ人を急募する求人欄のいくつかの嘘
「非正規は」言う人たちが期待した中途の正社が二日で辞めた
明日から我が社ではない屋上で空に飛ばした自作マニュアル

自由律の歌 2

ひなお

一番人気とメディアの言っていた石破新総理支持率28%の不思議
舗道に枯れ葉が落ちている踏むとぱりぱりと煎餅のような音がした
尋麻疹で20年か先生と私は同じだがが受付の女の子が何代かわる
兼好曰く気狂いの真似をしている者は気狂い飯山あかり正にそれなり
テレビではお門違いのゲスト等がどんな間にも自論？を語る
修司春樹は本歌取りモーツァルト松下電器も同じ 物創りの秘訣
山谷英雄と云う人の歌を読む上手いなと見れば佐太郎系の人なり
「強くなりたい人はお断り」なんだダイエット用ボクシングジムか

失敗だらけだ

廣珍堂

陽光は水面の下を見せぬまま無垢なる牙で氷山削る
マイクからお昼の校内放送の読み間違ひが千人へ飛ぶ
失敗もいいじゃないかといふひとがカレーうどんの飛沫を避くる
10ミリを適宜と書きし図面からミサイルが飛び味方を誤爆
休み時間にスキップで入る個室でもドアは薄くて誰かの水だ
本棚と同化しはじめグラビアは履歴を真つ赤な涙としたり
谷底で自我とふ石を蹴るならば山、川、空気、全て埋まりつ
泥水はヒエラルキーの底崩し扇状地なる羽根をつくりぬ

犇

御糸さち

よく当たる占いなんてないという、世界の制作秘話 昼下がりに
金の斧よりも電動ノコギリが良いけど水から出したのは駄目
地下鉄にパリヴァ（パーリーヴァンパイア）ひしめいている 渋谷へ向けて
数百年先 人類は顕微鏡のぞいてカントリーマーム見る
腹筋は崩壊しない 涙腺も崩壊しない 人体だもの
眠たくて笑ってしまうこの笑い声を夢まで持っていけたら
ひとりでも生きていけるよひとりでもジンギスカンで肉を焼けるよ
一回もリメイクされることのない人生でしたとてもあかるい

閃輝暗点

深影コトハ

夕風はやや死の匂い蜉蝣の羽の薄さで玉葱を剥く
詳細を伏せる二人の投稿を並べれば浮かびくる立体視
ぬるま湯で下着を洗う大切にしたら大切にされる気がして
ぐるぐるに振り回されて真つ白になって他人事みたいなシーツ
泣かざれば悲しくないと決められて私のお庭に小鳥を埋める
せ、い、よ、くと寝ながらフリックしてみればごらんよ十字を切る男たち
片時雨 調停調書謄本を三百円でコピーしにゆく
木漏れ日の斑点が腕に拡がって死ぬまでにやりたい百のこと

レッツ！エンジョイ！詐欺メイク

水上歌眠

くらげってどこから見ても映え角度うらやましくて泣きたくなるね
ハイライト・ローライトの間にぼつかりと浮かぶ私を探してほしい
『捏造！』と堂々書いて売っている涙袋の捏造キツト
目はでかい方がいいって思いこみ（思わされ）ほんとに得したのは誰
どの色か全然決まらんドラストで急に流れてくる阿修羅ちゃん
しあわせはパールの質感はみ出して過去も世界も塗ってしまえば
詐欺メイク 詐欺の予定はないけれど一番騙したいのは私
信頼がやがて依存になるようにメイクのやりすぎには気を付けて

耳に真珠（五十首詠より八首）

南の島

毎日を耳いっぱいを感じよう右鼓室形成手術が決まる
左向き眠れば音のない世界朝よわたしを忘れないでね
宇宙船みたいに乗ったことはないけど、あ、眠い、最後の記憶
維持液とはすごい名前だこれ抜くと干からびて死ぬ感じするもん
幾重もの包帯ガーゼ取る瞬間音は飛び込み脳かき混ぜる
ふわふわになつて倒れた肘の横耳から落ちる綿球ふわり
こんなときでさえ気になるギガバイト減るものばかり欲しがっている
さようなら真珠腫次は鼓膜ではなく耳たぶを飾ってほしい

箱詰の夢

水也

手のひらにふれたはずの羽は消えて僕はひとりでゆめをみていた
絞め上げる喉からこぼれゆく蝶の行く先はだれも知らないまま
白い服つかめなかった指先は力なく落ち夜に溶けゆく
まちがいをえらべなかったところからあけないでいてやるのはざまよ
まちがってないからきつとぼくたちのみちはいつかかさなっていくよ
雑踏のノイズのような機械音 相応しく在るみにくい体
ツリーから逃げ出した一番星の末路を夢に見る午前四時
終わらせてあげよう鳥籠の扉 開け放ったら春がくるから

山形線 北へ

六厥めれう

紙切符買うのが久しぶりすぎて投入口を探してしまう
乗り換えの客待ちをする過疎線は乗りたき者のすべてを救う
吹けば飛ぶ将棋の駒というけれど倒れはしても飛ぶことはない
信号を吹雪の中に探すためときどき立ち上がる運転士
着雪が枯れ木の先でまるくなり白梟の群れかとおもう
水よりも雪を落とせというように大きく口を開けている溝
雪国の仔とはいえども落雪の音に驚く犬は犬なり
白梟すつかり落ちて帰路にみる枯れ木は少し背を伸ばしたり

ジャスミンティー（茉莉花茶）

村田一広

化粧品溶かしたやうに鮮烈なジャスミンティーの薫りに酔へり
「煙いなあ。焼肉食べて来たのかい」「裏表焚き火で炙っただけです」
鍵盤を叩けば雨しぶきが散つて野外ライヴは最高潮に
南北に長い日本は「寒い」にも何十度もの温度差ありぬ
強いて云へば公園全体が家で訪ねればどこかに猫がある
体温を雪まで下げて溶かさないやうに雪まみれにて歩めり
長ねぎを買へばレジ袋飛び出してコントで見たのと同じ光景
雪国なら吹雪となるや我が町は雪の混ざらぬ空つ風吹く

はてしない5センチ

森内詩紋

白鳥が月の光を引いてくるだあれもない高松の池
シャッターの音とぼくらの呼吸だけ 薄氷はけして渡れはしない
足音が聞こえなくなり……ぼくは目を閉じず此処に居れるだろうか
冬用のワイパーせわしく動く対向車だつて帰る 何処かに
あつという間に咲くスノードロップス狼狽えるたび春雷が鳴る
贈りたいから贈るのだ それほどは高価ではないチョコを選んで
震度5がきたら安否確認を急ぐほどにはあなたが好きだ
はてしない5センチ闇に沈丁花香る頃にもきつと5センチ

揺れて（伍）

杜野詩季

十日経ち彼が実家にたどり着く 娘も驚く泣き顔見せて
お皿にはラップを敷いたどんなもの食べたか誰も記憶してない
コンビ二もスーパーも人、人の渦 列を作った美しい列を
二組の布団に三人湿り気は温かくなる眠りの底で
今日やつと戻ったテレビSFのようなニュースとCMだらけ
町内会会長が来る今日の午後信じられぬ水が戻ると
十日ぶりお湯はりはずシャワーだけ流した暗く重たい粒々
あの人が、この人たちが、と話そうとすれば声なき声だけ漏れる

日々歩く四季の光の多彩さが風ぐ感性を目覚ましていく

◆ 麻倉ゆえ

四捨五入すればわたしのさみしさも省かれてもうしづかな海辺

◆ 有村桔梗

きょうだいは「あちちのおさら」を理解した グラタン皿をふたつ買い足す

◆ 井倉りつ

四人から五人に増える空間が異常気象を妄想させる

◆ 石川順一

四艇のヨットを横に見送れば五艇目の顔してペリカンも

◆ 宇祖田都子

4つある次元のどこかに君がいる過去の写真を思い出にする

◆ ㇿ

幸せの4！とおどけて言ってみる「そう、ね。」と君が返す幸せ

◆ 歌島孟

曾祖母の呪文のように繰り返す三寒四温また春が来る

◆ 涸れ井戸

窓際に四月の雪が降り積もる嬉しいことが重なるように

◆ 河岸景都

しなやかな翼をひろげる四拍子 少女はしんと指揮台に立ち

◆ 北谷雪

ほらふきがはじめる四月を待っているやり直すなら子どもに戻る

◆ 君村類

わたくしの好きな数字は4ですね縁起が悪いと嫌われるから

◆ 久保田毒虫

降る花が幽界みたいにつづいて四半世紀はだまってしまう

◆ 小泉夜雨

抱きあつて四時間眠るもう朝に侵されはじめた夜の汽水で

◆ 西鎮

四葉のクローバーを探してあなたにあげたいの意味は訊かないで

◆ そう

ひとすじのマフラーなびかせ自転車を漕ごう三寒四温の速度で

◆ たえなかすず

あなたとは四度目になるてりたまを今年も買ってひとまずは春

◆ 千原こはぎ

世界一遠く飛ぶ紙飛行機を試した答案サイズはA 4

◆ とかげまろう

願わくは風を浴びたい駆けつづけ四肢粉塵のち石原に

◆ 中村成志

404 not found でも、あったことは忘れず書き続けたい

◆ 西淳子

三月は四日の花火いまもきみを傷つけ続けつづけてるんだ

◆ 西村曜

二人とも四人家族をあとにしてあらたに四人家族をつくる

◆ 袴田朱夏

次回作完結しても永遠に4号館で待っているから

◆ 畑 依裕

鉢植えの四葉のレッドクローバーわたしの窓辺でその手をひらく

◆ 薄荷。

保護犬を飼って4年も経ちたるが子どもを見ては今だ逃げ出す

◆ ひなお

ようやくと長編小説三巻目あと一〇〇ページで四巻目となる

◆ 平本文

トンネルを抜ければ盆地がうがうと四方の山より猛暑降り来ぬ

◆ 廣珍堂

葬列は緑の谷町四丁目駅から続く小さな海へ

◆ 福山桃歌

カフェランチ4等分の幸せをひとり頬張るクアトロ・フォルマッジ

◆ 古井 朔

起きるには早いかもと思っても二度寝するには不安な時間

◆ 真岡まな

「ほかに仕事は無いですか」午後四時にラストオーダーみたいに君は

◆ まさけ

「皇」と「陛」習う小学六年生 「周」と「富」「徳」知る四年生

◆ 御糸さち

通勤の優先席でOLが見慣れた第四形態になる

◆ 深影コトハ

四季咲きの花がそんなにこわいなら天国はおすすめできません

◆ 水上歌眠

そっと嚙んでみるみそ汁のさつまいも四万四千円の奥歯で

◆ 南の島

ジンジャーを練り込む甘い生地を切るおおよそ四時の空より駆ける

◆ 水也

減反の土の上にて四季面をくるくる変えて踊る老いたち

◆ 虫武一俊

三、四〇の食材が作りたてらしいホテルの朝食バイキングいただく

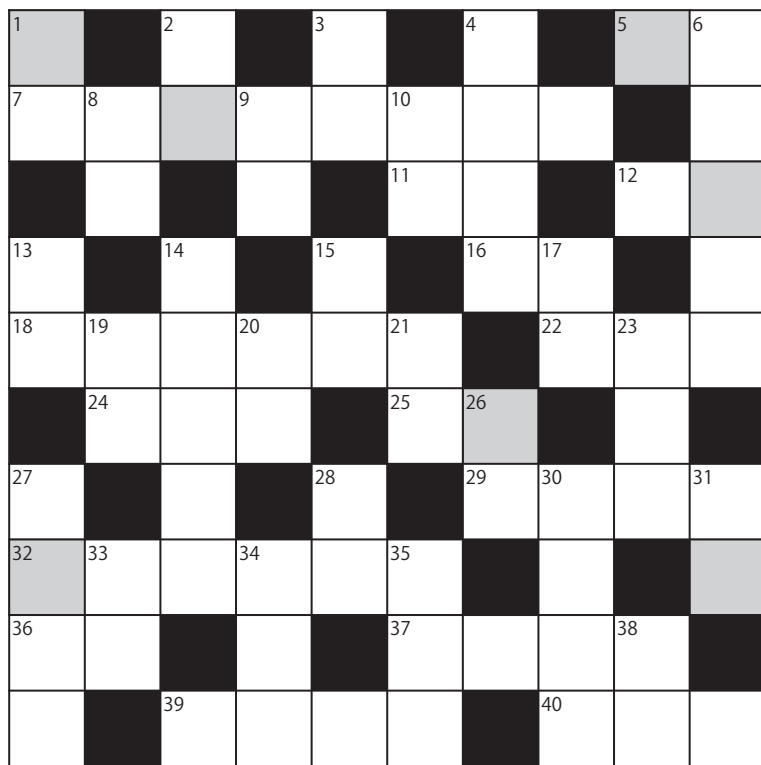
◆ 村田一広

お手ごろと笑われたっていいじゃない二人で決めた4℃なら

◆ 森内詩紋

4の字は「^f_o^rのために」とも読めて温かい今日できたforは三組くらい

◆ 杜野詩季



タテのかぎ

- あることの影響が他に及んだその名残
- 〇〇びきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む / 柿本人麿
- その時々につけられた物の値段
- 早朝にひらく野菜・魚などの市
- 保温または保冷用のポット
- 三角〇〇、宝〇〇、アミダ〇〇
- 母の住む国から降ってくる〇〇のような淋しさ 東京にいる / 伊万智
- 動物の指の先にある、かたいもの
- お父さん
- アメリカの首都「〇〇〇〇D.C.」
- かぎ
- マップ
- 柴田葵 歌集『母の愛、僕の〇〇』
- ここに物を置くと汚部屋につながると言われています
- 高知
- 今年もそろそろ飛び始めました
- 会議で相談すること、その内容
- 品物売り買いすること。商売。
- 手のひらが大きいねって言ったこと去年の〇〇のことにしないで / 嶋田さくらこ
- 羽根突きに使う
- 物事を始めるときに必要な土台
- 金木犀わからないまま生きていく〇〇のかたちに出るマヨネーズ / 岡本真帆

- ウクライナの首都
- 鳥のやわらかな羽や毛
- 液体に含まれる沈殿物・不純物などをこすのに使う紙

ヨコのかぎ

- 一回のオモテの〇〇の攻撃がもう三時間続いています / 田中ましろ
- 大勢の人が、手をたたいて大声でほめる行為
- 兄弟姉妹の娘
- 鼻の長い大きな動物
- 傘を盗まれても性善説信ず〇〇親のような雨に打たれて / 石井僚一
- 落下傘
- 写真や絵を使いいろいろなものを解説した本
- 人類が築き上げてきた有形・無形の成果
- 水辺に生息する、くばし、くび、脚が長い鳥
- 自動販売機を略して…
- 各種手当を除いたベースとなる給料
- みずみずしい秋のくだもの
- うすい紅色。ピンク。
- 惜しげもなくお金を使って派手に遊ぶこと
- 自分じゃないもの

色付きマスの文字を並べ替えてことばを作ってね



こたえ

一首評

西鎮

わたしには裏と表があるけれどどっちのわたしも深爪みたい

水上歌眠

〈天使〉をレンズとして現実とイメージが交差するよう一連「天使わいわい」の三首目。一連の、特に現実的な領域を象徴する一首に思われた。〈表と裏〉は実生活における作中主体の自覚。〈深爪〉は軽微な痛みや象徴と受け止めた。「自覚される自己の二面性の双方に痛みが付帯する」という矛盾めいた実感でもって、主体を含む誰もが現実世界で感じうる生きづらさが、瑞々しく詠われていると思う。



前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

一首評 そらよみ

「そらよみ」一首評募集

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。

ご投稿はこちらの
投稿フォームから！



一首評

中村成志

ぬいぐるみのひとつひとつにおはようのキス
をしている歯科衛生士

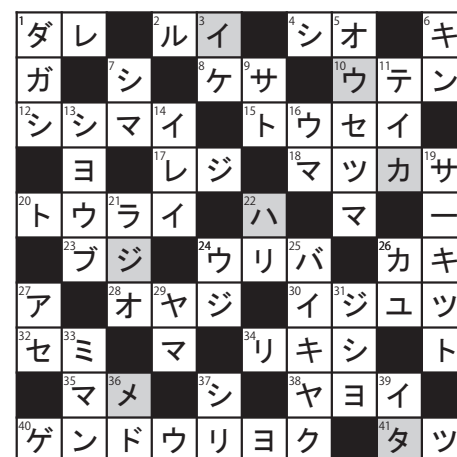
西淳子

虫歯は口づけで感染する。そういう説がある。
歯科衛生士を職業とする人が虫歯であるとは（一般的には）考えにくい。ましてぬいぐるみが虫歯に罹るなんて非現実的だ。
しかし、その二つの「まさか」が重なるどころどころ。ずらりと並ぶ（ひとつひとつ）と言うからにはかなりの数。ぬいぐるみに、自分の「虫歯」を移してゆく。ささやかで爽やかな感すらある、早朝のホラー。結句まで漢字が出てこない表記も効いている。

ほっとひととき クロスワード

こたえ
ウ タ カ イ ハ ジ メ

前号のクロスワードはいかがでしたか？
今号もどうかお楽しみいただけますように☆



望遠鏡 25

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…



書き手

小泉キオ

テーマ

ひろがりのある短歌

先日、nature の対義語が anti だと知って随分うつくしいなと思いました。かみさまが作ったのが nature、人が作ったのが anti というのが主力の説明らしいです。なるほどなあ、そう説明されると納得するような。ちなみに、一番情報量が多いのが自然でそれを五感に取り込んで解釈して出力するのが芸術、という説もあるとのこと。どちらかというところちの説が気に入っています。

短歌はまさに「自分なりの出力」なわけですが、平均出力 31 音しかない細いホースなので普通にやると水はちよろちよるとしか出ません。出ませんが、ときどき同じ 31 音のホースからこんな

にも水が?! 海が?! 虹が?! とそのひろがりに驚く歌に出くわすこともあります。短詩の醍醐味といえはその通りですが、やってみるとやっぱり難しい。あれどうやるんだろうな……虹出したいよな……出したくないですか……? 筆者は歌が散文的というか説明的になりやすく、伝わりやすい代わりにひろがりがない自覚があります。遅筋と速筋でいうと速筋タイプ。遅筋も使えるようになりたい。今回せつかくコラムという場をいただいたので、ひろがりのある短歌を研究してみたいと思います。

さてさてここであるひろがりとは、ひとつの短歌を入り口にしてその奥に広い世界がひろがっているように感じられること。いい映画をみている時に、何だか自身の思い出とか忘れていた感情が呼び起こされることがないですか。あれに近いです。あれを狙ってやれるようになりたいのです。共感性とか普遍性を意図的に自身と観客の間に置くという技術なんだと思います。ただ映画は総合芸術とも言われる情報量過多の媒体なので、全体をイメージしながら点描画の点を置いていくようなもの。逆に短詩はミニマルな芸術なので余白部分を想像させるようにシンプルな線を置いていくようなものかもしれません。

あなたとはずっと異教徒なのだろう春を希望の
／早月くら
ように祀って

夏風に森は薫って両想いだつたらきみと見たい
絵がある
／海月莉緒
焼き鳥を串に刺さつたまま食べるまた私から謝
るのか

上句と下句の比重が釣り合っていて、どちらかがどちらかの説明になってしまっていないこと。つまり、読み手に伝えることに重きを置きすぎていないこと。何となく一首全体に（実景かどうかは別として）本当に感じたことを純度高く織り込んで作られているんだろうなあ……という説得力があります。自身の感性に誠実である結果、読み手に伝えようとしすぎないこととなり、かえって歌の世界が広がって感覚的に伝わってくるというか。

二物衝突的な歌については、平岡直子さんが「起きられない朝のための短歌入門」の中で「狙っておきにいけるようなものではない」「手探りの作業になる」とおっしゃっていて、飛躍の名手みたいな平岡さんでもそうなんだ……!!! と安心したような、大の字になって倒れ込みたいような気持ちになりました。

王国は滅びたあとがきれいだねきみの衣服を脱がせてこする

／平岡直子

ちなみに同著の中では手探りのコツを二つ教えてくださっていて、そのうちの一つは好きな既存の衝突の仕組みを真似すること、とのことでした。

個人的には、海月莉緒さんの歌がいつも素敵だなと思っていて真似したいのですが、難しい……。

まぶしさに呼ばれたような、文庫本閉じれば川を横切るところ
／同
終末は海へ行こう、を誤字とせずこの約束を千年生かす
／同

三首とも早月くらさんの歌です。早月さんの歌はレースのカーテン越しに触れるような印象の繊細さがあってとても好きです。よく詩的飛躍というワードをききますが、早月さんの場合は単語の選び方とつなぎ方で詩性をきっちり持っていて、例えば「首目の「春」「希望」「祀って」と飛躍が単語単位でスパンが短いと感じています。これを真似しようとするともっとゴチャついた忙しなくなるところ、語彙のうつくしさと統一感でちゃんとまとまっている。あとは題材としては意外と身近な体感が歌の核になっているところが特徴だなと感じます。読者側も体感したことがある感情なんだけでも、自分では紡げない言葉で歌にしてくれているというか。「千年」という言葉もついで大仰になりがちですが、希望とか祈りのような感情を載せることで手の届く範囲の言葉になっており、違和感がありません。歌の核の部分で共感させてくれつつ、表現で世界をひらいてくれるパターンとでも言いましょうか。

機嫌なら自分でとれる 地下鉄のさらに地下へと乗り換えをする
／榊原紘

榊原紘さんの「悪友」は多分一番読み返している歌集なのですが、全部理解できているとは

先日、作者の意図とはそれぞれ違う読みで複数の方から歌を褒めていただくことがありました。くすぐったい気持ちもありつつ、本来の自分のリーチより外で誰かと手を繋げたような気がして嬉しかったです。読みが分かれた箇所は、文字数の関係もあり意図的に説明しなかった部分でした。それが良かったのかなあ。曖昧な部分をそれぞれの読み手の方が自身に引き寄せて読んでいただけた幸運というか。このコラムの前半の部分で「短詩は余白を創造させるようにシンプルな線画を描くようなもの」と勝手に認識を記しましたが、その話を続けるならば線を書きすぎると余白が消えてしまふんだなあと感じました。あんまり伝えすぎようと思わないほうがいいという話、歌歴三年にしてやっと腑に落ちてきたかものです。

31 音のホースのちよろちよるから虹を出したいんだみたいな滅茶苦茶な話もしましたが、虹がかかる時だつて半分運みたいなものだし、結局たくさん歌を作って手探りしてみるしかないんだと思います。誰かから見たら、角度によって虹がかかっているかもしれないし。虹を出せる詠み手に、虹だ! と見つけられる読み手にしたいものです。



ご感想は
こちらまで!

Twitter(現X)
ハッシュタグ
#うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄 「休」
一首評 「そらよみ」
短歌リレーコラム 「望遠鏡」
リレーエッセイ 「いちごいちえ」

第26号

短歌募集

第26号 25 4/30(水) 24時

8首の連作 自由詠 テーマ詠「休」 1首

第27号 25 6/30(月) 24時

8首の連作 自由詠 テーマ詠「度」 1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

まさに三寒四温!という気候が続く今日このごろ、いかがお過ごしでしょうか。わたしは久々に風邪をひいてしまい、いま喉の痛み+鼻水と戦っているところです。皆様もどうかお体に気をつけて、元氣でお過ごしくださいね。

さて、短歌誌「うたそら」は前号で丸4年、今号から5年目に突入いたしました。ご参加いただいている皆様のおかげでここまで続けることができましたのだと思います。今後も未永くお付き合いただけると幸いです。

次号×切は4月末、発行は5月頭になります。テーマ詠のお題は「休」。たくさんすてきな作品を楽しみにしております!

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら

第25号

参加歌人様 52名

連作欄 41名

テーマ詠欄 40名

一首評 2名

コラム 小泉キオ さん

エッセイ 高田皓輔 さん

ご寄稿いただき
ありがとうございます
ございました!



illustration: kohagi chihara

国道のマクドナルドのプレイランドはドライブスルーから見えていた

高田皓輔

マンションに住んだことがない。そしてこれからマンションに住むことはないだろう。自信がある。マンションや高いところにいると、今わたしはとても位置エネルギーが高い、と思ってしまう。その位置エネルギーはふとしたときに運動エネルギーに変わって、ものすごい速さで落ちてしまうのではないかと、という恐怖に襲われてしまう。どうしてみんな普通の顔をしていられるのだろうか、落ちたらひとたまりもないのに!、落ちないよって、笑って言うけど本当に? それとして、マンションに憧れがある。小

学校の頃、マンションに住んでいた友達はいない。それはマンション特有のコミュニティが、帰属意識みたいなものがある気がしてこれは親同士のコミュニティによるものだと思う。それゆえの社交性がマンションに住む友達にはあつて、そこに混ざってもらうわたしはその社交に乗っかって見よう見まねで、マンションの探検をしていた。マンションの友達は人を家に招き入れるのに慣れていたり、お菓子やジュースが用意されていたりして、「家」が社交の側面を持っていた。わたしの「家」はほとんど人を家に招くことがなく、そういうホスピタリティというものを両親から感じることもなかった。新鮮に、他人の家庭や、その周辺のコミュニティと、自分との違いを感じ取っていた気がする。

自分の家や町、所属に帰属意識をしつかり持つことは大事なのだと思う。都会でも田舎でもないような地域でほとんど育った。ちゃんとした都会に出ようと思えば一時間くらいはかかる。少しチャリを漕いで隣町に行けば畑が広がっていたり、小学校が統廃合していたりする町があるが、自分の住んでいる町は、

ベットタウンとして宅地が増え続けていた。生活には車が必要で、土地はあるから、ホームセンターやショッピングモールは十分にあって困らない。それゆえ、都市的な、田舎的なアイデンティティーのどちらもなく、言うところば郊外であり、帰属意識が大してない。どういったところに住んでいるか、所属しているかを簡潔に自虐的にならずに相手に伝えられるかがしっかりと帰属意識を持つて町を、所属を容認して生きていくことだと思う。今のところわたしは、町や所属を説明するのに、自虐的に文字数を割いて紹介してしまう。そういう町だからこそ、マンションはひとつのランドマークであり、マンションに住む友達はどこに住んでいるのか聞かれたとき、「あそこに住んでいる」といえば済む。その軽やかさに憧れていた。

これからわたしは、町を選んだり、所属する場所を選んだりしていくのだろう。軽やかに説明することができるだろうか。そのためにマンションに住むのだろうか、住むとしたら低層階だろう。そうして、なぜ低層階に住んでいるかに文字数を割くのだろう。

25
リレーエッセイ
いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは...

テーマ マンション
書き手 高田皓輔



うたそら 第25号

発行：2025.03.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>